

2019年度 校内研修計画

1 研究主題

きき合い 学び合い 支え合う 協同的な学び
～学びに夢中になれる生徒の育成を目指して～

2 主題設定の理由

国頭村は、学校改革推進のテーマに『すべての児童生徒の「学び」の保障を目指して』を掲げ、「学びの共同体」の理念に基づく学校教育を推進している。

国頭中における「学びの共同体」の理念による学校改革とは、

- ①「学びの共同体」づくりで、校訓「自学」「自律」「自力」や教育目標を具現化し、諸教育活動の充実を図る。
- ②「学び続ける生徒は崩れない」という理念を基に、生徒指導の三機能(自己決定の場、自己存在感、共感的人間関係)を生かして、「積極的(予防的)な生徒指導」や「不登校生徒の改善」につなげる。
- ③教師主導の「教え込む授業」から生徒主体の「生徒の考えから出発する学び」に切り替えることにより、「習得・活用・探求型学習」及び「言語活動」の充実を図る。
- ④職員同士の「同僚性」を構築するとともに、保護者や地域住民との連携を強化する。

これらのことを実践することにより、『一人残らず、すべての生徒の学びを保障する』ことができると考える。

以上のことをふまえ、本校では、「きき合い 学び合い 支え合う 協同的な学び」を本年度の研究主題に掲げ、全教育活動を通して「きき合う学級づくり」と「授業改善」を両輪とした学校づくりをすすめていく。「きき合う学級(授業)づくり」の構築、「授業における課題設定、や生徒同士の学びをどうつなげるか」の「授業改善」を図ることにより、一人ひとりが主体的に学びに向かい、学びに夢中になれる生徒の育成につながると考える。

3 研究内容

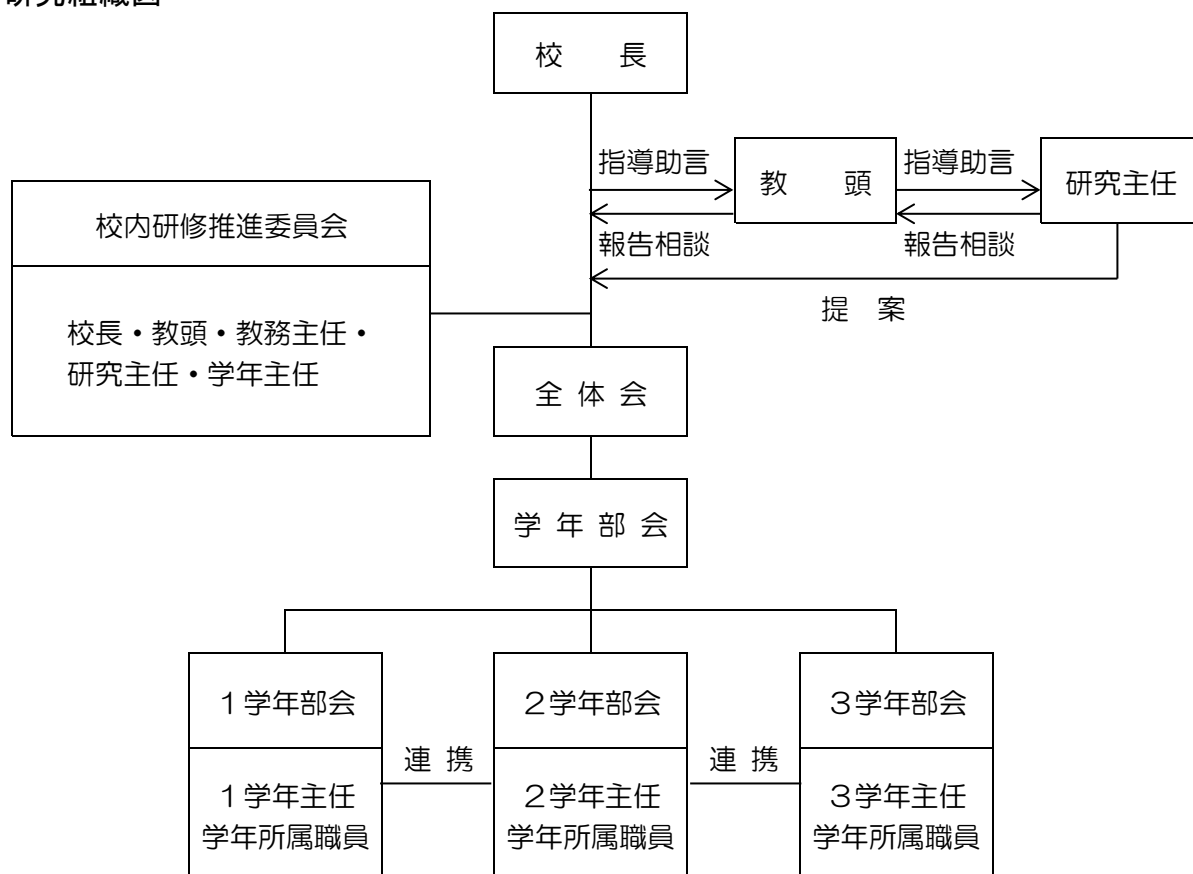
- (1)生徒と生徒、グループとグループ・全体を繋ぐ教師の言葉とポジショニング、タイミングの工夫。
「きき合う学級づくり」に取り組み、「対話と協同のある学び」の基盤となる「きき合う関係、ケアし合える関係、安心して学べる関係」を構築し深い学びへと導くための工夫)
- (2)個人の追求テーマに沿った、深い学びにつながる発問・課題設定の工夫
「三つの対話」(「教材との対話」「他人との対話」「自己との対話」)が三位一体となった協同的な学びを構築することにより、「習得・活用・探求型学習」及び「言語活動」の充実を図り生徒の主体的な学びを生み出すための工夫。)
- (3)授業研究協議会(リフレクション)の内容充実と個々の授業へのつなぎ方の工夫。
(「教師が何をどう教えたか(指導法)」ではなく、「生徒が何をどう学んだか(生徒の学びの事実)」を授業観察の視点に置き、教科の壁を越えて「授業力(教師力)」を磨き合い、個々の授業作りに生かす工夫。)

4 研究方針

- (1) 学校教育目標及び本年度の重点目標を全職員で共通理解し、目標達成のために研修を行う。
- (2) 校内研修と学力向上の推進が連動して実践できるようにする。
- (3) 全国学力状況調査、沖縄県到達度学習調査等の結果を分析・考察し、該当学年における課題を焦点化し、日々の授業に生かす。
- (4) 授業参観者は、生徒の発言やつぶやき及び行動を観察し、子どもの学びの様子を見とる。リフレクションでは、授業における「生徒の学びの事実」を全員が1分30秒以内で述べる。

- (5) 経年研修以外は、授業デザインシートを作成し、すべての教師が年に2回以上、授業を公開する。
- ①全体研修：年3回実施（村・教育事務所の指導主事を招聘し、各学年代表による授業研究を全職員で実施する）
＊必要に応じて、学年研修を行い生徒理解・授業作り・同僚性の構築に努める。
 - ②授業公開旬間：年2回実施（空き時間を利用し、授業参観を行う。授業参観シートを活用し、授業改善に生かす）
 - ③教科会：2週間に1回(教材の共有、学力テスト等の分析、授業作りなどの時間に充てる)
 - ④個人研修：適宜（校長、教頭、授業のない教師による授業研究を実施する）

6 研究組織図



7 研修計画（案）

回	月	日		研 修 内 容	担 当 者	主事名	
						教育事務所	教育委員会
1	4	5	金	理論研修（学び） いじめに関する研修	研究主任 生徒指導		
2	4			全体研修①（ 年） 授業者：仲宗根 直也	研究主任		委員会主事
3	5	15	火	全体研修②（ 年） 授業者：	研究主任		永島先生来校 主事
4	6	14	金	特別活動(キャリア教育)（仮）	研究主任		
5	7	25	木	情報教育(活用)（仮） 道徳教育（仮）	情報担当 道徳担当		
6	7	26	金	生徒理解/支援について(仮)	生徒指導		
7	9	26	水	全体研修③（ 3 年） 授業者	研究主任		齋藤先生来校 主事
8	10	11	金	全体研修④ 「 」 授業者：東江 敏也（5年研）	研究主任	主事	
9	11	13	水	全体研修⑤（ 1～3 年） 授業者：全職員	研究主任		佐藤雅彰先生 来校 主事
10	2	12	水	全体研修⑥（ 年） 授業者：	研究主任		佐藤学先生来校

○年に2回授業公開旬間(1学期，2学期に1度ずつ)を設ける。

1学期： 月 日() ～ 日()・2学期： 月 日() ～ 日()

○2週間に1度，教科会を設ける。

○数学と国語は、年に1度主事を要請して、授業研究会を設ける。

授業者 国語 新城 志乃 月 日 ()

数学 月 日 ()

8 具体的な取組(共通実践事項)

(1) 生徒との対応を変える

- ① 教師のテンションと声のトーンを下げて対応する。
声の小さい生徒、弱い生徒への配慮し、小さい声でも聴き合えるようにしたい。
深い沈黙と思考のあるしっとりとした授業を目指す。
- ② 教師が一方向的にしゃべらない。(教室の声→教師 20%、生徒 80%)
教師の仕事は「聴く・つなぐ・もどす」＋「ケアする」に徹する。
教師の発信から受信へ、「教える」から、「気づかせる・考えさせる」発想への転換
- ③ 教師はゆっくりしたテンポで話す。教師の発問や生徒の発表後の「間」を大切にする。
「じっくり待つ」とは…しっかり考えさせる「間」を与えることである。
- ④ 生徒とのかかわりを柔らかくにしてじっくり対話する。
生徒のつぶやきや、顔の表情まで見取りたい(「何か言いたそう」の支援)
- ⑤ 生徒を怒って統制しない。大勢の前で一人を怒らない。(個の尊厳)
放課後や休み時間等に、個別にゆっくり静かに過ちを悟らせたい。

(2) 学習形態の配慮「コの字」型の机配置。ペアやグループなどの形態を効果的に導入する。

- ① 「コの字」型に配置することの意義
ア 教師も、生徒同士も学級全体の各々の表情を見取りやすい。
イ 生徒が互いの意見が聴きやすい。(仲間の意見や考えを聴くための机配置である)
ウ 教師と生徒の距離が縮まりつぶやきや、生徒の困り感に対応しやすい。
- ② 「小グループ活動」を位置付けることの意義
ア お互いの考えや意見のすり合わせの場として設定する。みんなの考えを1つにまとめる活動ではない。
イ 一斉授業では発表できない生徒でも、近くで小さい声で話せる機会として設定する。特に弱い生徒への配慮である。「分からない」ことを聴ける雰囲気づくりを大事にする。
ウ 机の高さは可能な限り統一する(イスで高さ調整)。机は隙間なくくっつける。
男女混合の編成にする。机の横には物を提げない。グループ間の距離をおく。
エ 学びが停滞しているグループ、学びから外れているグループへ積極的に支援する。

(3) まずは、「きき合う学級づくり」に取り組む

- ① 生徒同士が、互いの話をきき合う雰囲気を学級内につくる。『聴く作法』
- ② まずは、話の聴き方の手本として教師が生徒の話を「眼」「体」「心」でしっかり受けとめて聴く姿勢を示す。生徒の発表途中に決して口を挟まず、すべて受け入れる。
- ③ 生徒の目線に合わせるために、教師の姿勢を低くする(イスに座る)。声の小さい生徒やつぶやきには、教師が寄り添って聴いてあげる。
- ④ 困っている生徒が他者に依存しやすい雰囲気をつくる。
「わからない」「教えて」「意味分かん」が日常的に言える(認められる)ようにしたい。

(4) 授業研究

「学びの共同体」にもとづく授業研究とは、優れた授業づくりのための理論や技術の習得を目指すものでなく、一人ひとりの生徒の学び権利を保障し、高いレベルの学びに挑戦する機会を実現させる教師の専門性を高めることを目的としている。授業の中では、生徒達一人ひとりが教材や教師や仲間達とどのようにかわり合いながら学んでいたのかを多角的に省察する。

学びの場としての授業研究会の目的（佐藤 学）

- 1) 他者の授業実践や生徒の学習の様子から学ぶ
- 2) 自己の授業実践を振り返る
- 3) 同僚とともに学校が志向する授業のヴィジョンを共有する

① 「『対話』と『協同』のある学びの授業スタンダード」を日々の授業改善に活用する。

② 公開授業・授業リフレクション（研究協議）のねらい

すべての教師が授業を公開し、「教師が何をどう教えたか（指導法）」ではなく、「生徒が何をどう学んだか（生徒の学びの事実）」を視点に授業を観察し、生徒の固有名で具体的な姿を全員が述べる授業リフレクション（研究協議）にすることにより、教科の壁を越えて「授業力（教師力）」を磨き合い、同僚性を構築する。

③ 授業研究の方針

ア すべての教師が授業を公開する。

イ 授業者は、授業デザインシート（裏面に座席表）を作成し参観者へ配布する。

ウ 授業後のリフレクション（研究協議）に重きを置く（指導案作成など、事前に余分なエネルギーを注がない。同僚は授業についてアドバイスを求められたら必ず相談にのる）。

エ 校内研修のテーマを意識した授業の構築にこだわる。

オ 見せるための「すごい授業」でなく、日常の授業の公開を心がける。

カ 研究授業をする先生から授業をみる視点の要望があれば、その点についてもリフレクションのなかで語り合う。

④ 授業リフレクション（研究協議）の方針

ア 参観者は、生徒の表情やしぐさ、つぶやきや他とのかかわりの様子など、観察したことや授業を観察して学んだことを語り合う。

イ 参観者は、生徒の固有名（名前）を挙げて、「どこで『学び』があったか。どこで躓きがあったか。」など授業リフレクション（研究協議）の視点を踏まえて観察したことを話す。

ウ 優れた授業の追求ではなく、一人ひとりの生徒の学びを成立させることとその質を高めるために、生徒一人ひとりの学びの事実に対する教師の対応（聴く・つなぐ・もどす・ケアする）のあり方について省察する。

エ 形式的な文言や美辞麗句はさける。何も語らないのは授業者に失礼である。

⑤ 授業リフレクション（研究協議）の流れ

ア 授業に関しての協議

- ・ 生徒の学びの事実を語る、生徒同士のつながりを語る、ジャンプ課題の質を語る。

イ 協議内容及び授業からの学びの発表

- ・ 授業を見ての学び、生徒の学びの良さ・姿、気になるグループ、授業者への質問

ウ 授業者コメント

- ・ ねらい、うまくいったこと、苦労したこと、困ったこと、クラスの状況、研究協議からの

エ 指導助言

- ・ 授業を見て学んだこと、生徒の学びの良さ、気になるグループ・生徒の学びの姿

(5) 生徒の学びへの意識を高める

- ① 年度初めに生徒会による「学び」のオリエンテーションを実施。
なぜ「学びの共同体」の理念による授業を行っているのか、どのように学んでいくべきかモデルを提示する。
- ② 学びに関する生徒アンケートを実施し、生徒一人一人の「学び」の実態を把握し、改善に努める。
- ③ 「学びの目標」を設定し、生徒の意識を高める。

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">A 級友に自分の言葉で説明・教えることができる。B わかったことやその過程を自分の言葉で説明することができる。C 自分で思考し、解決できる。D 級友に分からないことを「きく」ことができる。 |
|---|

9 参考文献

- (1) 佐藤学著「学校の挑戦」「教師達の挑戦」「教師花伝書」（小学館）
- (2) 佐藤雅彰著「公立中学校の挑戦」「中学校における対話と協同」（ぎょうせい）
- (3) 大瀬敏昭著「学校を創る」「学校を変える」（小学館）
- (4) 田中耕治編著「パフォーマンス評価-思考力・判断力・表現力を育む授業づくり-」（ぎょうせい）